

Title	『惠棟校本春秋公羊伝注疏』について
Sub Title	
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1988
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.23 (1988.) ,p.225- 242
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本隆信教授退職記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000023-0225

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『惠棟校本春秋公羊伝注疏』について

高 橋 智

臧庸（武進の人、乾隆三二〜嘉慶一六）が嘉慶の初に阮元（儀徴の人、乾隆二九〜道光二九）の聘に応じて所謂十三經局に於いて『公羊伝注疏』の校勘にあたった際に拠った、^{（注1）}『惠棟校本春秋公羊伝注疏二十八卷』（阮元『春秋公羊伝注疏校勘記』引拠各本目錄）の注疏本の項に載せる）について、引拠各本目錄の、その項に附された注を吟味することによって、この校本の持つ意義を明らかにし、『公羊』の版本源流の概略を知る為の一助としたい。

*

注の全文を挙げると次の如くである。嘉慶間文選樓刊『十三經注疏校勘記』に拠る。

「惠棟校本春秋公羊伝注疏二十八卷何焯字仲友云：『康熙丁酉偁同門李広文秉成所買宋槧官本手校，再令張翼庭、倪穎仲各校一過。』惠棟云：『有曹通政寅所藏宋本『公羊』，合何氏所校宋槧官本、蜀大字本及元版注疏，并参以石經、用朱墨別異。癸酉冬月識。』按惠云『朱墨別異』者今不能詳。大約鄂州官書經注本最為精美。」

以上の注について、一句ないしは一節ごとに、関連する諸書、諸本を調査し、そこに記された清代諸学者の校語、跋語、識語の類を検討してその結果明らかとなった事実や推定、疑問等について、一四項目に分けて述べることにする。

*

一、「何煌字仲友」

吳蔭培撰△擬補蘇州府志何煌伝△（宣統元年刊△何義門先生家書△の後に附載）に言う。

「何煌字心友，号小山，一字仲友，為義門先生介弟。嘗自

署何仲子。

按△土礼居藏書題跋△卷四△西溪叢語跋△云：「乾隆辛酉七十四病叟煌記」当為康熙戊申年生。

自崇明遷蘇州。義門初官翰林，煌亦至京師見△義門先生文集△卷九△跋李賀歌詩編△

婦里与蔣杲、陳景雲輩皆義門弟子，以文字往来……また「……阮文

達校勘△十三經注疏△於△公羊△△穀梁△，皆拋煌所校宋槧

官本見△崇明△與志△……と。

二、「云：『康熙丁酉』至『校一過。』」

何煌がこの識語を記した事実については、

上海図書館蔵の汲古閣本△春秋公羊伝注疏△二八卷に見える（注2）

書入によって知ることが出来る。この本は△中国古籍善本書

目△卷三經部春秋類に次の如く著録する。「春秋公羊注疏二

十八卷漢何休注 唐徐彦疏 唐陸德明音義 明崇禎七年毛氏汲古閣十三經注疏本 清張爾耆校 清吳孝頤錄惠棟 沈大成校

識語などを紹介すれば次の通りである。

「蜀本公羊校經注三司／元板注疏／宋槧官板校經注全／唐石經校經」と原表紙に墨書する。つまり校勘に用いられた板本の

列挙である。その原表紙に付箋があつて、「墨筆 元和惠氏

本／綠筆 沃田沈氏校／庚寅 嘉平□錄畢 權堂」と墨書す

る。原表紙の後には副葉子が二丁あり、綠筆で次のように過

録の始末を記した付箋がある。「惠校公羊注疏為吳權堂主政

重録。朱墨筆一依惠／氏。間有綠筆作成案者，沃田沈氏所

加。是書／惠氏凡三四校，当自精審。然読之猶有疑似之処，

視他經為疎。豈伝授者所脱漏耶！／咸豐二年三月伊卿張爾耆

錄畢，書此。」十一月取阮芸台相国 元校勘記覆校一過，又

／訂正十之二三。並附齊召南、段玉裁、盧／文昭、孫志祖、

浦堂、嚴杰、諸家之說／以備参考。」惠棟と沈大成（雲間

の人、康熙二八〇乾隆三六、沃田は号（注3）の校勘を吳孝頤（注4）

（婁東の人、乾隆四六年進士、權堂は号）が庚寅の年（道

光一〇年か）に録し、咸豐二年に同じ婁東の張爾耆（嘉慶

二〇〇光緒一五、伊卿は字）が重録したものであることを（注5）

示す。従つて、以下ではこの本を張爾耆書入本と呼ぶことと

する。張爾耆は更に阮元の△校勘記△と校し、齊召南等の經

説を摘録して參攷に附した。卷三末に「借蜀本大字校此三

卷。与鄂州学官書最為精善。惜無單／本疏校疏文脱譌也。康

熙五十六年冬十月望日小山何煌記」と朱書。卷三の尾題下に

「春秋公羊伝第一」と朱書し、さらにその下に「十月廿六日呵凍復校」と小字で朱書し、改行して「蜀大字本鄂州官本」と小字で録書する。卷二二の末は「春秋公羊卷第五」（朱書）、「十月廿七日官本覆校」（小字墨書）。卷一四末は「春秋公羊卷第六」（朱書）、「十月廿五日覆校」（小字墨書）。

卷二八末は「壬戌六月十八乙巳始廿六日癸丑畢。／庚午三月初五戊申重閱。壬申二月十七日己酉復閱。松崖」（朱書）、「康熙丁酉仮同門李広文秉／成宋槧官本手校、再令張翼庭、倪穎仲各校一過。今以其／手校本相勘、猶有漏落。三人／僅敵一手、何秉成之糸髮如心也。書以識媿。巳亥初夏何／仲友。／癸亥重校。」（朱書）、「有曹通政寅所藏宋本《公羊》、／合何氏所校宋槧官本、蜀／大字本及元板注疏并參以石經、用朱墨別異。癸酉冬月惠棟識。」（録書）、「《校勘記》曰：「惠云：「朱墨別異」、今不能詳。大約鄂州官書經注本最為精美。」（録書）。

卷末にしるされた何焯の識語は、康熙五六年に何焯が《公羊》を校したとともに、校後に跋語をしるした事実が確かであることを物語る。しかし、此の阮元の《校勘記引拠各本目錄》の惠棟校本の注には、この張爾耆書入本の卷三末に過録

されてある何焯の識語が漏落している。従って、この注に於いては何焯校するところのテキストは、李秉成が買い得た宋槧官本のみと理解されるが、実はそうでなく、蜀大字本をも校勘に用いていた事が知られる。

三、「康熙丁酉」

康熙五六年。何焯五五歳。何焯四九歳。何焯門下のひとり、姚世鈺（呉興の人、字玉裁、蕙田と号す、生卒年未詳、康熙乾隆間の人）が、何焯の校本を過録した汲古閣本《春秋公羊注疏》二八卷（北京図書館蔵）^{（注6）}に以下の識語を記す。「康熙丁酉壯月心友以石經校对経伝訛事、寄至都下、略為改正。孟公識。」又、「辜月復寄至宋雕官本異同、復得略改正邵公注中訛字、雖炙硯不為疲也。^{（注7）}佗日有力、則重開以公諸人人。」（ともに《蔵園羣書経眼録》による）この年の八月に何焯が《石經》によって経と伝を正し、北京の何焯に送った。孟公は何焯を指す。そして、その十一月にふたたび宋雕官本との異同対校を寄せて来た。それによって何休（邵公は字）注の字の誤りを正し得たとする。宋雕官本は、李秉成が買った宋槧官本で、即ち鄂州官書を指そう。この事実は、張爾耆書入

本の何焯の識語、復校の日付と相符合する。

四、「李広文秉成」

広文は職称で教官。張爾耆書入本の何焯の識語に言うごとく、何焯、張翼庭、倪穎仲の三人の校勘でようやく李秉成ひとりの校勘に匹敵する程、李秉成の校勘は細密であった。張爾耆書入本の、昭公四年「楚子執徐子」[△]についての「人官本李校 諸本同」、一二年「宋華玄何寧華定自陳入于宋南里以畔」注「自曹入于蕭不言宋」についての「官本重言宋二字 李校」、一二年「秋劉子单子以王猛入于王城」注「不月者」についての「官本作不月 無者字 李」、三箇所墨筆の校語が見えるのは、李秉成の校が伝えられて残るものであらう。

△何義門先生家書▽（宣統元年刊吳蔭培編△義門先生集▽に附す）に次のように名が見えている。

「…聞嘉興程瓊家藥店中即斬河台幕賓全虎骨膏甚好，但頗貴，如何？近日湖州船上有本把旧書否？秉成往省下，蘇州少一収書之人，子遵比他又隔壁也。…」（康熙五十五年）

「…△医学發明▽可謂宝書，惜我不能読；△試効方▽不知与所借秉成之本可以互鈔配足否？亦可喜也。△困学紀聞▽可以抄補毛家欠葉脫字，使其完善大妙。…」（康熙五十

六年）

「…所寄△西崑詠唱集▽却修得不到家，抄本上字我草草對出而秉成有未脩者。上卷又闕了第二十葉，又二十二至二十四三葉。且俟王六郎到，今其抄補也。…」（康熙五十七年）

「…麗天所帶來書，渠家父子極言其妙也。魯常表弟尚未見到。毛家瑞官書皇甫持正、李元賓二本，揀去可惜。皇甫持正秉成所對皇甫氏所刻耶，即汲古閣刻本也？如即汲古閣刻本，但對出之字鈔來寄与我足矣。充壽非所敢望也。」

止李元賓一本已足…」（康熙五十八年）

五、「宋槧官本」

この本は、後掲のように△欽定天祿琳琅書目▽に南宋刊鄂州学官書とされる本で、夙に康熙五六年に何焯が借閲して、李秉成の蔵に帰していたわけである。阮氏△掇勘記▽のこの注の最後に、「大約鄂州官書經注本最為精美」と言うゆえに、十三經局に於いては無論、宋槧官本と鄂州官書とを同一本と見做している。張爾耆書入本の校語に於いては、「某官本」と眉上に記す記述法であって、「鄂州官書」と記す箇処はみ

あたらない。しかし、その何焯の識語に鄂州学官書をもって校したとあるから、校語中の「官本」と「鄂州学官書」とは同一の本と考えてさしつかえない。姚世钰記す次の二つの題識を参考にする。

「宋刻公羊伝跋

友人半查四兄見示此本宋刻鄂州官書《公羊解詁》、復出義門何先生手校毛氏汲古閣雕本注疏、属為对勘。大抵何据《石经》及宋官本、与此同者十之八；而此書異処并灼然訛誤、別以朱牋標記其上。卷尾脱去一葉、計伝注約三百余字。余即据何校本抄補重裝。於是邵公《解詁》、人間尚留此完善之書。蓋不独馬氏子孫永以為宝、儼質諸前賢嘉惠来学之意、亦弗嫌其妄作也已。」（乾隆一八年序刊《辱守齋遺藁》卷四所載）

「馬氏叢書樓有何義門先生手校此經。余因攜本借勘、凡句詠悉仍其旧。佩今四兄又出家藏宋鄂州州学官書、俾余覆校、并記其異同於辺闌之上。義門跋語：『欲重開以公諸人人。』蓋其珍重如此。今原書已歸江北。余復為移騰、流布浙西。倘有有力者克広其伝、是亦何先生嘉惠来学之心所樂与、豈独汪氏家塾珍祕而已。乾隆丙寅姚世钰記於揚州寓齋。」

（《文祿堂訪書記》卷一所載）即ち汲古閣本《春秋公羊注疏》（北京図書館蔵）に記す題識。

半查とは馬曰瑤（楊州の人、字佩兮、号は半槎とも、生卒年未詳、馬曰瑄（康熙二七〇）の弟、《南齋集》三卷）があり、姚世钰との親密さを伝える。即ち小玲瓏山館主人。

姚世钰は、何焯校本の汲古閣本《公羊注疏》と宋刻鄂州官書《公羊解詁》を対校したのであって、前者の題識を鄂州官書の為に、後者の題識を何校毛本の為に記したのである。それによれば、何焯校する所（実際には何焯が校しているのは前項三の資料によってわかる）の《石经》と宋官本に、鄂州本は八割がた一致するという。従って、宋官本と鄂州本は同一のものであるとしてよい証左になる。

康熙五六年に李秉成なる人物が蔵していた宋官本は、乾隆一一年にいたって、楊州の馬氏に帰っていた事実が知られる。そもそも、「官本」「鄂州学官書」などという呼び名を持つゆえんは、《欽定天祿琳琅書目》卷一、宋版の項の「《春秋公羊経伝解詁》十冊」に対する解題に明らかである。

「漢何休学、十二卷。休自序。鐫刻年月不載、而字体甚古。於宋孝宗以上諱皆闕筆、知為南渡後刊。書中每間数紙、輒

有真書木印、曰鄂州州学官書、曰鄂泮官書、帶去準盜。考王心麟《玉海》、咸平四年六月詔：郡県有学校聚徒講誦之所、賜九經書一部。大觀二年六月、州学藏書閣賜名稽古。則州郡諸学置官書、自宋初已行之。李心伝《朝野雜記》載、王瞻叔為学官、常請摹印諸經疏及《經典積文》、貯郡県以贍学；或省係錢各市一本、置之於学。是南渡後猶重比舉。且有準盜之条、官守為綦嚴矣。闕補卷十二末。（光緒一〇年長沙王氏刊本による）

闕筆によつて、南宋刊本であると知られるが、刊記もないらしく詳細は解らない。書中、数葉ごとに真書（楷書）の木印つまり「鄂州州学官書」「鄂泮官書帶去準盜」の印を捺すという。鄂州は今湖北省武昌。後者の印は帶出嚴禁の意で、学官の藏書には時にこの種の印がある。

なお、この書目の巻首に、乾隆皇帝が御覽の書を詩に詠じた御製の「茶宴詩」（版心題）があり、その内の一句に、

「墨守疵攻膏与育公羊伝注疏紅印鄂州霑紙湿公羊解詁即何休注徐彦疏
宋建本末有鄂州州学官印 臣程景伊」（小字は注）
（注8）（注9）

とある。ただし、書目中、《公羊伝注疏》は同じく巻一宋版の項に「《監本附音春秋公羊注疏》二函十六冊」また巻七明版の項

に「《十三經注疏》二百二十冊」（…此明北監本也…）と著録があるのみである。

《玉海》《朝野雜記》ともに宋代学官が藏書を重んじた事実を記した資料としてあげる。「闕補卷十二末」は、馬氏叢書樓に於いて姚世鈺が「据何校本抄補重装」した事実を指す。乾隆一一年には揚州の馬氏の藏本であったが、乾隆四〇年以前には昭仁殿に帰していた。

六、「張翼庭、倪穎仲」

《義門先生集》に附する《義門弟子姓氏録》に、「張翼庭」の名がみえる。張進、字翼庭。《何義門先生家書》卷一に収める康熙五五年の家書に次のようにみえる。

「…每日必至下午、与衆人齊散。故顧先生及子遵回字皆遲発也。儼深病体何如？我無扇子俱閣中失去、要師洛、彦瑜、斗文、

卓人、雲上、倫序、明古写八分、翼庭、儼深、淑師合景写一

把小字扇来、不周為号及称呼也。…」

張爾耆書入本の桓公一一年、「突婦于鄭」の注、「常言鄭突」△に「当官本張校」と朱筆にて残された校の、「張校」はおそらく張翼庭の校を意味するであろう。

倪穎仲については今未詳。

七、「惠棟云」

惠棟がこの識語を記した事実は、張爾耆書入本によって明確である。この識語が伝えられるので、惠棟校本という名があたえられる。

八、「曹通政寅所藏宋本《公羊》」

曹寅は、字子清。棟亭、荔軒、雪樵、柳山、警叟などと号す。生卒年は順治一五（康熙五一）。千山（遼寧省）の人。官は通政使。季振宜（泰興の人、崇禎三）、順治四年進士」と徐乾学（昆山の人、崇禎三（康熙三三））所藏の書を多く得る。

その著《棟亭書目》（《遼海叢書》第八集所収）巻一に「春秋公羊伝宋本 漢司空掾何休序注十二卷 一函六冊」と著録するのがこの「宋本《公羊》」に相当し、そして、この本は後に上海涵芬樓の蔵になっ

て、北京図書館の現蔵となる。《涵芬樓燼余書録》《藏園羣書經眼録》《中国古籍善本書目》にそれぞれ著録がある。汲古閣から棟亭に移ったものである。その間に、孫朝讓（注10）（万曆二八？（康熙二九？））の蔵をも経ている。

錢謙益（常熟の人、万曆一〇（康熙三））の《絳雲樓書目》

に「宋板公羊伝十二卷」（小字は陳景雲の注）があり、この本は、同じ常熟の錢曾（崇禎二（康熙四〇））の《述古堂藏書目》巻一に「何休春秋公羊伝解詁十二卷 積文一卷 四本」と著録され、《季滄葦藏書目》延令宋板に「公羊経伝十一卷 四本」、また《讀書敏求記》（章鈺校証本）「春秋公羊経伝何休解詁十二卷 積文一卷 此北宋本之精絶者。故附積文於経伝後。若南宋人鏤刻，便散入逐条注下矣。」（「此北宋本」以下錢曾注）と著録される本に同一であると推測されるが、この曹棟亭旧蔵本と何らかの関係にあると思われる。

九、「蜀大字本」

諸家目錄に著録が見えない、今伝わらぬ一本である。張爾耆書入本の原表紙に記す、校勘に用いた版本の列挙のひとつに「蜀本公羊校経注三弓」とあるのが即ちこれである。「三弓」という表現から解るように、首三巻のみの校勘に用いられている。無論、蜀大字本の三巻ではなく、汲古閣本の三巻である。この書入本の巻三末（即ち《隱公》の末）に康熙五六年何焯が、この蜀大字本を借閱校勘した旨を記す識語があり、何焯は、既にこの蜀大字本を目にしていたことが知られる。

ただ、張爾耆書入本をみると、卷三までにとどまらず、卷四以降にも「大字本作某」という校勘の記述が朱筆であられるのであるが、それは、誰が関与したものであるのかを明確に知り得る資料はない。阮氏《校勘記序》には、「今更以何焯所校蜀大字本」と記しているから、十三經局では、蜀大字本に関与した人を何焯のみであると考えている。

しかし、「蜀大字本作某」という校勘の記述は、阮氏《校勘記》の中に、張爾耆書入本の中のそれよりも数多くあらわれる。そして、その両者は、必らずしも一致するわけではなく、むしろ相補いあうようにみえる。

十、「元版注疏」

張爾耆書入本の、原表紙に記された、校勘に用いられた版本の列挙のひとつである「元板校疏」がこの元版にあたる。無論、「校疏」という記述は元板が単疏本であることを意味するのではなく、主として元板を疏文の対校に用いた事を意味する。

首題や尾題に朱筆で「監本附音」とつけ加えているところから、ここに言う元板とは、元刊《監本附音春秋公羊註疏》

二八巻を指すであろう。阮元がその《十三經注疏》の底本に用いたいわゆる十行本注疏である。《公羊》の注疏本においては、宋版が存在せず、しかもまた、何焯も「惜無單本疏校疏文脱譌也」（張爾耆書入本卷三末識語）と嘆くように、当時、即ち何氏の康熙、また更に惠氏の乾隆、阮氏の嘉慶、いずれの時代にも単疏本《公羊》を見得なかったから、十行本を用いた疏文の校勘は、頗る意義があった。

惠棟の跋語の文脈からでは、この元版注疏を何氏が校したのか、惠棟が校したのか、あるいはまた惠棟が重校したものなのか判断としない。^(注11) 目にした本が元刊本か元刊明修本かの差異も明確ではない。阮氏《校勘記》に於いては、疏文について「何校本作某」などの校語が多く見えるところから、総じて、この元版注疏を用いて校勘に関与したのは何氏であると判断しているようである。この阮氏《校勘記》の中で、「補刊本某誤某」の如く、原刊本と後修本との差異を明らかにしているのは、十三經局による校勘である。^(注12)

なお、この十行本《公羊註疏》^(注13)について、詳細な校勘を行っていたのに、昭文の王振声（嘉慶三〇同治四）がいる。罍里の瞿氏の為に校書にあたったもので、その校勘の成果は、

△鉄琴銅劍樓藏書目錄▽卷五「監本附音春秋公羊註疏二十八卷^(注14)宋刊本」の項に収められる。その解題に次のように述べる。

「阮氏校勘此經，最多疏舛。其所拋者僅何氏焯校本。何校繫汲古閣本。其与十行本異同多未之舉，反有以何校毛本誤為十行本者，不知毛本譌而十行本未譌也。」

特に、疏文について阮氏△校勘記▽の誤りを訂し、毛本と十行本の差異、また何校本と十行本の差異、などについて詳細に検討している。この校勘記の王氏の手稿本が上海図書館に蔵されている。

一九二二年に蔣汝藻^(注15)（吳興の人、光緒一即一八七五？〜一九五四）が宋刊単疏本を北京で入手し、自ら精抄本を副録して同郷の劉承幹（光緒八即一八八二〜一九六三）^(注16)に与えた。劉承幹は一九二八年に阮氏△校勘記▽を補う形で校勘記をつくり、単疏本に附して公開し、嘉業堂叢書に収めた。原本は後に南海の潘宗周（咸豐六即一八五六〜一九三九）^(注18)を経て、北京図書館の現蔵になる。

十一、「石經」

何焯が康熙五六年に△石經▽と対校した事は前述した。当

時、△開成石經▽は拓本によって容易に目に行うことができた。△経義考▽卷二八八刊石二に著録する「唐国子学石經^(注19)存」が即ちこれである。清初には顧炎武（昆山の人、万曆四一〜康熙二一）が△石經考▽を著し、乾隆の初には、杭世駿（仁和の人、康熙三五〜乾隆三八）が△石經考異▽を、嘉慶の初^(注20)には、嚴可均（宛平の人、乾隆二七〜道光二三）が△唐石經校文▽を著し、彭元瑞^(注21)（南昌の人、雍正九〜嘉慶八）の△石經考文提要▽が刻されている。従って、康熙、乾隆、嘉慶、いずれの時代にも、原拓本または攷異の研究著作を通じて、△石經▽に接し校勘するのは容易であったと言える。^(注22)

十二、「朱墨別異」

惠棟はおそらく、何焯と自らの校勘の記述に、朱と墨で區別をつけようとしたのであろうが、阮氏△校勘記▽に於いても「今不能詳」と言う如く、その朱墨の區別は困難である。^(注23)張爾耆書入本もしかりである。そして、このことがまた、惠棟の識語の解釈にいくつかの可能性を残してしまった。つまり、「何氏所校」がどこまでかかってゆくのか、という解釈についてである。

そこで、張爾耆書入本の校語を詳細に検討して朱墨の区別を推測してみるが、「棟案」とする惠棟の案語にも、朱あり墨ありで、分別することができない。明らかに言えるのは次の二つのことだけである。ひとつは、宋槧官本、蜀大字本、元版注疏についての校語は全て朱筆によるもので、《石経》についての校語は朱と墨と両用であること。もうひとつは、曹寅蔵宋本を指すであろう「宋本」についての校語は、朱筆の「宋本三字訛二」（定公十年三月注「三大夫出不月者」についての校語）とする一箇条のみであること。

ただ、阮氏《校勘記》中に、「宋本」の名が張爾耆書入本に比して多くみえるのは、十三経局が用いた惠棟校本には、《宋本》についての校語がより多く残されていたからであろうか。

以上、一一項目の検討から概観するならば、何焯は、官本、蜀本、《石経》を校し、何焯は元版注疏を校した可能性がある。惠棟は、蜀本、元版注疏について重校したかも知れないが確証はない。曹寅蔵宋本は校した。また、《石経》については自ら重校している可能性が高い。として察するに、この惠棟の識語の解釈については、次のように解釈するのが無

難であろうか。

「曹寅所蔵宋本を校し、何氏の、宋槧官本、蜀大字本、元版注疏についての校勘を聚合し、更に、既に何氏も校しているが、《石経》を参校し、朱筆と墨筆で区別を示す。」
《石経》についての校語が朱墨両用であるというのも、「并参」ということの意味を物語るものであるかも知れない。何焯の、官本の校語に比して、惠棟の宋本の校語が夥しく少ないのはまた、惠棟の校勘に対する姿勢と、何焯のそれとの違いを意味するのであるかも知れない。

十三、「癸酉冬月識」

張爾耆書入本の卷二八の最終葉の、何焯、惠棟の識語と同じ箇所に、「壬戌六月十八乙巳始廿六日癸丑畢、庚午三月初五戌申重閱、壬申二月十七日己酉復閱 松崖」と朱筆で記す。壬戌は乾隆七年、庚午は乾隆一五年、壬申は乾隆一七年、癸酉は乾隆一八年。惠棟は三度に亘って閲し、五六歳の時に題識を記した。

十四、「大約鄂州官書経注本最為精美」

前述の王振声が、《鉄琴銅劍樓藏書目錄》卷五「春秋公羊經伝解話十二卷宋刊本」の項に解題を記して言う。

「阮氏《校勘記》称鄂州官書經注本最為精美。今攷此本，足以攷訂鄂本者頗多。」此本とは宋紹熙二年建安余仁仲万卷堂刊本のこと。更に言う。

「觀《記》中別載數條，併言有關葉兩處此本不闕。似獲見此本。

不知何以未經備錄，且引拋各本目錄中亦不載及，殊不可解。

揚州問礼堂汪氏近有翻本，款式相同，惟一經伝刻，不無譌

脱，其句讀圈法失去大半。斯固無闕宏旨而譌字未經訂正。

且復転抛他本，多所刊改，是正固多，沿譌亦不少。用悉校

録於後，并略加弁正，俾覽者無惑焉。」

《記》とは阮氏《校勘記》。この《校勘記》の中に、余仁仲本についての校語は、隱公卷第一元年伝「元年者何」、また注

「十二月之摠号」に対しての二条のみである。(注24)そして、僖公

卷十一、十五年と文公卷十四、十三年の二箇所に、余仁仲本の闕葉各一頁の記述があるに過ぎない。従つて、十三經局では、余仁仲本を見ることができたようであるが、何故仔細に校せず、更にまた、《引拋各本目錄》にも載せないのか、不可解である、と言う。

考えられるのは、原本を目にしたのではなく、他の校本の校語を用いたのではないかということである。

張爾音書入本にも、朱筆で余仁仲本の校語を伝えるが、校勘に用いた版本の列挙の中にも、その他跋文の内にも、余仁仲本の名は一切見えない。

葉德輝の「校宋本公羊伝注疏二十八卷汲古閣本」跋（《郅園讀書志》卷二）によれば、この校本中にも余仁仲本の名が校語にみえるが、誰による校であるかは明確でない。

「…書中引校本，今惟余仁仲本道光中汪中間礼堂仿刻，宋刻

原本猶藏常熟瞿氏，余則散亡久矣。嘉慶二十一年阮文達刻

《十三經注疏》于南昌府学，撰《公羊校勘記》，引拋单經

注疏各本，僅載惠校何本，余皆闕、監、毛刻諸本。当時余

仁仲本在同郷友人家，不知何以未暇借校，且《校勘序》中

亦未語及，皆事理之不可解者。」

何らかのかたちで、余仁仲本の存在を知ることができたにもかかわらず、その《序》にも《引拋各本目錄》にも録さないのは何故かという疑問が残る。

余仁仲本のうち、北京図書館現蔵本は、潘氏宝礼堂旧蔵に係り、《宝礼堂宋本書録》に著録する。季振宜、徐乾学を経て、

嘉慶道光間には汪喜孫（江都の人、乾隆五一〜道光二八）の蔵になり、^{（注25）}後に黃彭年（貴筑の人、道光二〜光緒一五）の目を経て、李新吾、袁克文の遞蔵になる。^{（注26）}

もうひとつ、台北故宮博物院現蔵本は、四部叢刊初編に影印される一本で、常熟瞿氏の度蔵に係る。やはり季振宜が蔵し、乾隆の際に蔣宗海^{（注27）}（丹徒の人）が有し、嘉慶一三年に黃丕烈（吳興の人、乾隆二八〜道光五）が購入した。^{（注28）}道光年間汪士鐘（長洲の人）に渡り、咸豐年間に文登（山東省）の于氏小謨觴館が蔵した。^{（注29）}

二本の伝流を俯瞰するだけでも、何焯、惠棟、十三經局、それぞれが余仁仲本を目にし得る状況にはあつたと言えようが、実際に校勘に用いたとする識語は伝わらない。

康熙間、何焯について、余仁仲本との関わりを見てみると、
《愛日精廬藏書志》卷五に次の如き著録があるのを参考にす
る。

「春秋公羊経伝解詁十二卷 臨何氏校宋 余仁仲本 漢何休学、後有経伝注音

義字数三行、余仁仲刊於家塾一行、上方臨惠氏評閲語。卷

三後題識云：『借蜀本大字校此三卷。鄂州州学官書最為精善。惜無单疏本校疏文脱誤也。康熙五十六年冬十月望日小

山何焯記。』康熙丁酉冬假同門李広文秉成所買宋槧官本手校。再令張翼庭、倪穎仲各校一過。今以其手校本相勘、猶有漏落。三人僅敵一手。何秉成之心如糸髮也。書以識愧。

己亥初夏何仲友。『蜀本校経注三卷。元板校疏、宋槧官本校経注全。唐石経校経。惠松崖評閲。』

要するに、張爾耆書入本の跋文と同じものが移写されているわけである。ここでは、「臨何氏校宋余仁仲本」をどう解釈するかが問題になる。結論を先に言えば、何氏の校記を臨抄した宋余仁仲本、ととるのが適切であろうということである。そもそも、《公羊経伝解詁》十二卷という書名と巻数は、経注本にのみのものであり、経注本のうち、宋槧官本は、張金吾（乾隆五二〜道光九）の時、宮中に帰している。また他に、蜀大字本や曹寅所蔵宋本もあつたが、若しこれらのいずれかであるとすれば、板種を明確にするはずである。一般に、清代の書目の著録法として、著録本が通行本であればその板種を省略して、重視すべき性格のみをしるす。しかるに、当時、《公羊》の経注本は通行本でなかつた。従つて、「宋余仁仲本」というのは、この著録本の板種を示す記述であると考えられる。

ただ、経注本に「元板校疏」という疏の校語を臨抄することはできない、などの疑問は残るが、いずれにせよ、「何氏が余仁仲本を校したものを臨抄した通行本」という解釈は適切でない。

《愛日精廬藏書志》は、増補ののち、道光七年の顧広圻の序をもって刻されているから、ここに著録する宋余仁仲本とは、道光四年間礼堂刻するところの翻余仁仲本である可能性が高い。

何氏の校語を、余仁仲本に臨鈔するのは、かく意味があるのであるから、何氏の校語に、余仁仲本に関するものがあったとは考えにくい。

次に、乾隆の際、余蕭客（呉郡の人、雍正七〜乾隆四二）の《古経解鈎沉》^(注30)をみるならば、その巻二二に「何校余本」からの引証が四箇所にみえる。^(注31) 惠棟に近かった余蕭客が「何校余本」というからには、惠棟は余仁仲本を校してはいなかったと考えられる。しかしながら、「何校余本」というが、何氏による余仁仲本の校語であるかどうかはともかくも、乾隆以前に既に余仁仲本についての校記が伝えられていたことは、注意するに値する。

更に、嘉慶の時、十三経局による《校勘記》にみられる余仁仲本についての校語のうち、隠公元年の二条の校語は、張爾耆書入本にない所であって、十三経局では惠棟校本に拠る以外に、独自に原本に接し得たとも考えられる。しかし、それにしてもたった数条のみの校語を加えるだけというのも粗に過ぎる。

いったい、余仁仲本について、現存する二種と、張爾耆書入本、阮氏《校勘記》がそれぞれ拠ったと思われるものと、関係があるのかどうか、という問題について、各本の闕葉箇所を整理することを手がかりとしてみてみると以下のようなことになる。

	(イ) 卷五僖公 一五年	(ロ) 卷五僖公 二六年	(ハ) 卷六文公 九年末	(ニ) 卷六文公 十三年	(ホ) 卷十二 末
張	×	×	×	×	○
校	×	×	×	×	○
北	○	○	○	[×]	○
四	○	○	○	○	○

「久也」の「也」から一六年「曷為重師」の「重師」から「必自此始世」の「必自」まで
「少差」か「同年」難不「まで」

(注) 張||張爾耆書入本が拠る本、校||阮氏《校勘記》が拠る本、

北〓北京図書館本（但し、《宝礼堂宋本書録》による）四〓
四部叢刊本、×印は闕葉、○印は不闕、北京図書館本（「×」
は、「卷六」とのみ著されていて、この箇所かどうかは不明
の意。

要するに、どれとどれが一致するということがない。あえ
て言うならば、《校勘記》では、惠棟校本から抄出する時に、
（四）の闕葉について漏落してしるさなかつたと言えるかも
知れない。とに角、若し原本に接し得たならば、《序》にも
示すはずであるし、詳細な校語があつて然るべきである。こ
のことは、何焯、惠棟にも言えることである。

何故、余仁仲本はこのような不可解な流伝をたどることに
なつてしまつたのだろうか。唯一、確かに原本に接して、密
な校勘に従事するを得たのは、昭文の王振声のみであつた。

注

(1) 臧庸が惠棟校本を用いた事実については、次の資料がある。

「校宋本公羊伝注疏二十八卷汲古閣本

校宋本《公羊伝注疏》二十八卷、康熙丁酉何仲友名焯、義門
先生之弟

以宋槧官本校于毛晉汲古閣刻注疏本上、乾隆癸酉惠松崖徵

君棟掇何校、増入曹通政寅所藏宋本、蜀大字本、元版注疏
本重校一本。其小門生朱邦衡臨校之。乾隆癸丑臧在東鏞堂
亦臨校一部。其年七月段懋堂玉裁又臨一部。江鉄君沅復從
段臨過録此本、以貽其門下士陳碩父奐。奐於咸豐紀元手書
其伝授于卷端。……」（葉德輝《郇園讀書志》卷二）

すなわち、咸豐元年、陳奐（長洲の人、碩父は字、段玉
裁に師事す、乾隆五〇〜同治二）が、校書の伝授過程を手書
したのによると、康熙五六年に何焯が校し、惠棟（元和の人、
康熙三六〜乾隆二三、松崖は号）が乾隆一八年に重校した。
そしてこの校本を朱邦衡（宝応の人）が臨校した。乾隆五八
年には臧庸（在東は字、鏞堂は初名）と段玉裁（金壇の人、
雍正一三〜嘉慶二〇）が臨校し、江沅（呉県の人、？〜道光
一八、鉄君は字、声の孫）が段氏の臨校本によって過録した
ものを、門下である陳奐に貽した。「十三經注疏校勘記」の
準備が始まつたのが嘉慶の初、嘉慶五年には臧庸が阮元の聘
に応じて校にあつている。（張慧劍編《明清江蘇文人年表》
による）なお、この葉德輝が著録するところの汲古閣本《春
秋公羊伝注疏》は、北京図書館現蔵。閉庫の為未見。

(2) 蔵印に、「蔣祖詒讀書記」「合衆圖書／館蔵書印」「補盒／読

書ノ之記」「景葵所ノ得善本」「徐柳泉藏書記」「武林葉氏藏書印」がある。七冊。

(3) 沈大成が校したのが幾年かは不明。ただ、乾隆二三年に、惠棟校本を借りて《礼記注疏》を校した（上海図書館蔵汲古閣本《礼記注疏》残卷）から、沈大成と惠棟校本とのまじわりは密接であることは確かである。今、惠棟自筆の校本が伝わらない以上、沈大成の手を経た惠棟校本は伝授に於いて最も信頼するに足る校本であると考えられるから、この張爾耆が過録した本の持つ意義は大きい。

(4) 吳芸閣の弟である。王欣夫（光緒三二即一八九六〜一九六六）が、汲古閣本《周礼注疏》（上海図書館蔵）に記した識語に次のように言う。

「芸閣又号銘茶，原名昕，改名敬輿，又改名樹本，婁县人。乾隆三六年進士。由編修擢侍読学士，充日講起居注官，教習庶吉士，歴典陝甘湖北試。乙卯福建副考官，未入簾，以疾卒于途。年五十七。弟孝頤，字季揚，又号確堂。乾隆四十六年進士。皆有才名。時称二難。」

(5) 張爾耆の重録本は、自ら副本として抄録したものが十三経注疏全卷（汲古閣本）の形で、湖北省図書館に蔵される。張

爾耆については、顧蓮（華亭の人、道光二〇〜宣統二）の《素心篋文集》（四卷、一九一三年跋刊）の卷三に「張夫齋先生墓誌銘」がある。韓応陸（雲間の人、嘉応三〜同治一）蔵する宋本、同郷の姚椿（乾隆四二〜咸豊三）蔵する沈大成校本を多く借りて校勘した。姚椿は、桐城の姚鼐（雍正九〜嘉慶二〇）に学び、朱沢溧（宝応の人、康熙五〜雍正一一）の学を表彰した。それ故、張爾耆は《桐城文学淵源考》にも録される。また、朱沢溧の書を尽く過録したと言う。著に《夫齋詩集》（一九一四年序刊）、《夫齋雜著》二卷（一九一八年松江封文権刊）がある。

(6) 邢贊亭旧蔵。閉館の為未見。

(7) 敵寒の中、墨水が凍るのを懐炉で暖めてから筆を浸すのも苦にならぬ程、歡喜に満ちている、の意。（顧廷龍先生御教示）

(8) 「末有鄂州州学官印」というのは、解題の「毎間教紙輒有真書木印」というのと違いすぎるのはいかなるわけか。

(9) 武進の人。字聘三。乾隆四年進士。生年不詳。乾隆四五年卒す。《四庫全書》正総裁のひとり。

(10) 《明代千遺民詩詠二編》（張其銓撰祁正注）卷七の注によれば、次の如し。

「孫朝讓、常熟人。崇禎辛未進士。由刑部員外知泉州府，迭陞至江西布政司，未赴而明亡。優遊林泉四十餘載。年九十卒。」字本芝。

(11) ひとつの参考として、汲古閣本《周礼註疏》（清吳昉録清何焯、惠士奇、惠棟校跋本、上海圖書館藏）に過録されてある何焯の識語を見ると、《周礼》については、康熙四五年に内府にて「宋板元脩本」（十行本註疏を指そう）を過目して粗校したと記されている。また、阮元《周礼注疏校勘記序》の惠棟校本の注に、盧文弨曰くとして、「東吳惠士奇暨子棟以宋注疏本校疏」とする。この宋注疏本も十行本註疏を指すであろう。つまり、《周礼注疏》についてみる場合、何焯の校があつて、更に惠棟の重校があり、それぞれが十行本註疏に接していたと考えられるのであるが、《公羊》についても、これと同じことが言えるかも知れない。

(12) 阮氏《校勘記引抛各本目錄》「監本附音春秋公羊注疏二十八卷」についての注に「補刊修版至明正徳止」とある。

(13) 《統碑伝集》卷七九、《常昭合志稿》卷三〇人物九文学、に伝がみえる。字宝之。号文村。道光一七年の挙人。《十三經校勘記補正》を著したと伝えられる。

(14) 北京圖書館現蔵。「元刻明修」である。

(15) 伝書堂、密韻樓を有す。その蔵書は、祖孫三代の収書にあわせ、王鳴鑾（錢塘の人、道光一九〜光緒三三）万宜樓の善本を受けつぎ、後に上海涵芬樓に大部分が歸し、北京圖書館に多く蔵される。字孟蘋、号樂庵。

(16) 副録した精抄本に、一九二三年の自跋があり、この経緯を記す。復旦大學圖書館蔵。

(17) その影印本が《統古逸叢書》四十所収。

(18) 《宝礼堂宋本書録》著録。刻工名から、南宋中期の刊本と推定される。

(19) 朱彝尊は、「公羊十卷」とするが、これは「公羊十二卷」の誤りであるという。（嚴可均による）

(20) 刊刻にはならなかったが、錢大昕（嘉定の人、雍正六〜嘉慶九）が《唐石經攷異》を著している。（《涵芬樓秘笈》第六集所収）嘉慶六年に顧広圻（元和の人、乾隆三二〜道光一五）がこの本を借録している。

(21) 彭元瑞は《欽定天祿琳琅書目》の編纂官であつたから、昭仁殿の善本を校することを得、《公羊》に於いては、北監本、十行本、武英殿本、鄂州學官官本、明閔齋佚本などと《石經》

を校した。阮氏《校勘記》に多く引用される。

(22) 無論、《石経》そのものについての真偽の問題も小としな
い。例えば、錢大昕が「潜研堂金石跋尾統」(丁丑叢編)《唐石
経考異》(吳騫編)の中で、

「顧氏所拳石経之失，大半出於明刻，而援為口實，不知其裝
潢本所誤也。」

と言う。顧氏は顧炎武。《石経》は原刻と補刻の違いを明確に
する必要があるわけだが、何焯、惠棟の当時、そのような作
業をしたという記録はない。十三経局に於いては、《校勘記》
の中にその両者の区別を考じている。

(23) 阮氏《校勘記》には、「惠棟校本云…」「何校本云…」とい
うように、惠棟校と何校を分別している箇所が多い。例えば
次の如くである。桓公二年注文「言及者使上及其君」に対し
て、張爾耆書入本は朱筆で「案注言及者以下九十九字当在経
文之下。僖十年疏可据，官本亦同誤」と録するのみだが、《校
勘記》では「何焯云言及者以下九十九字当在経文之下，僖十
年疏可据，宋鄂本亦誤」として、この案語が何焯のであるこ
とを明示する。同じく桓公三年経文「公会紀侯于盛」に対し、
張爾耆書入本は「盛二伝作邲」(墨筆)、《校勘記》では「惠棟

云二伝作邲」という具合である。この様な例は少なくなく、
十三経局では、何焯と惠棟との校語を区別する何らかの根拠
があったのであろうか。

(24) 《十三経注疏》に附する盧宣旬摘録本に於いてはこの二条
のみであるが、単行本の《校勘記》には更に次の二条がある。
哀公一四年注「崇徳致麟」に「余本誤政」、また注「徳合者相
反」に「余本友誤反」。

(25) 道光四年に汪喜孫は武進の劉逢禄(乾隆四一〜道光九)と
ともに校して翻刻本を刻している。同治二年には邵陽の魏彦
が閩本との校勘記を附して重印した。後、板は金陵書局に帰
した。

(26) 《蔵園羣書経眼録》「春秋公羊経伝解詁十二卷」の解題按語
に、
「此建本之至精者，袁寒雲以三千金得之李新吾。」
と。袁寒雲は袁克文、世凱の子。李新吾は章鈺《四当齋集》
卷九参照。また、《四庫全書簡明目録標注》によると、
「興文薛煥蔵余仁仲单注本今歸袁寒雲」
という。興文は四川省。薛煥は嘉慶二〇〜光緒六。

(27) 《飛鴻堂印人伝》卷五、《墨香居画識》卷五、《清画家詩史》

丙下、△墨林今話▽卷四に伝がみえる。乾隆一七年の進士。

生卒年未詳。著に△春農吟藁▽がある。字星巖、号春農。

(28) この本の末尾に、黄丕烈の跋文があり、この経緯を述べる。

△士礼居藏書題跋記▽卷一、△鉄琴銅劍楼藏書題跋集録▽（瞿良士輯、上海古籍出版社、一九八五）卷一所載。

(29) その主人は、于昌遂。潘景鄭先生御教示。

(30) 一九三六年魯氏陶風楼の影印、△補刊古経解鉤沉▽による。

(31) 「襄公十二年 経 字異 春王三月」「成公五年 伝 河上

之山也」「昭公五年 伝 匿嫡之名也 注例 嫡子生不以名令於

四方扱勇猛者而立之」いづれも、張爾耆書入本、阮氏△技勘記▽に収めぬものである。

本稿は、上海の甸諺顧廷龍先生に御教示たまわり、復旦大学の章培恒、李慶両先生の懇切な御指導をいただいた学習の報告である。ここに感謝いたします。

(補注) 四の「李広文秉成」△について、北京図書館藏宋刊本

△育徳堂奏議▽の収蔵者に康熙間の李秉誠なる蔵書家があり

(古逸叢書三編之二十八所収、丁瑜先生撰△影印宋本育徳堂奏議

説明▽による)、両者は同一人物である可能性が高く、清代蔵

書家中、さほど著名ではない、官職の高からざるひとりであろう、という。(冀叔英先生の御注意)